

## < 論文 >

### 文化資源と図書館の機能に関する一考察

齋藤 泰則

本稿は近年注目されている文化資源の概念について取り上げ、その特性について論じるとともに、文化資源の枠組みから図書館と文化との関係を考察し、再定式化したものである。考察を通して、文化の資源化には3つの段階があり、図書館はその最終段階にあたる文化資源の体系化と共有化に関わる機能を担うとともに、文化の資源化の第一段階にあたる事象・事物の文化の資源化の基盤を提供する機能を有することを示した。

#### はじめに

近年、文化を資源という側面からとらえた新たな研究分野を形成する動きが展開されている<sup>1)</sup>。ここでは、文化を資源として記録・保存し、体系的に組織化・蓄積することが考究されている。

図書館は伝統的に出版物という文化的活動の所産を選択・収集・組織・蓄積・保存し、提供するという重要な役割を担ってきた。文化資源という概念の導入により、図書館が担ってきたこの役割がどのように再定式化できるのかを考察する。

そこで、まず文化と図書館との関係に関する基本的な考え方を確認する。次に資源という広い枠組みのなかで文化資源というものがどのように位置づけられるのかを見ていく。そのうえで、文化資源の特性について検討し、文化の資源化における図書館の位置づけと機能について考察する。

#### 1. 文化と図書館

文化とは次の定義に見られるように、人間による経験や思想・行動・感情など、人間の様々な活動の

なかで学習と伝達の対象となるものといえる。

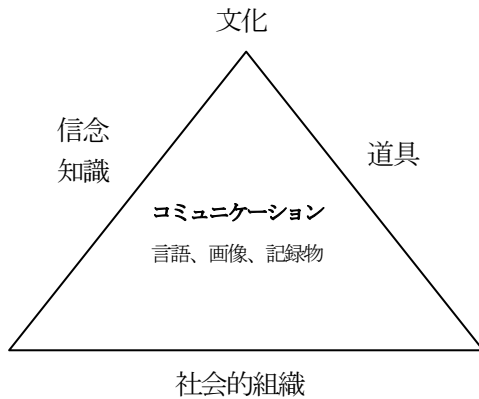
動物の行動はもっぱら遺伝と本能によって支えられているが、人間は、遺伝と本能に加えて、経験と模倣、および言語を通して、集団の一員としての思考、感情、行動を仲間から学習(習得)し、獲得したものを同世代、後世代の人々に伝達する。こうして集団の一員として学習、伝達されるものが、一つのセットとして統合性をもつ総体を文化と定義できる<sup>2)</sup>。

図書館は学習と伝達の対象となる知識が記録されている図書を中心とした資源の提供を通して人間の学習と伝達に寄与する存在である。J.H. Shera は、図書館の基本的機能を文化的遺産(cultural heritage)の保存と伝達として定義<sup>3)</sup>したうえで、図書館と文化との関係について、文化に三層の区分を設け図1のように三角形の概念を用いて説明している<sup>4)</sup>。

第一の辺は「知識」や「信念」であり、伝達と保存の対象となるものである。すなわち、社会が産みだした理論的な構成要素の総体であり、社会の経験から派生し、哲学的体系、理論体系、さらには人間と他者や自然との均衡ある知的・精神的関係を形成するものである。

2012年2月6日受理

さいとう やすのり 明治大学文学部

図1 図書館と文化との関係<sup>5)</sup>

(出典：Shera, J.H. *Introduction to Library Science*. p.44.)

三角形の第二の辺は文化を支える物理的道具であり、信念や知識という文化を保存し伝達するための物理的装置である。古代では粘土板やパピルス、木簡等の書写メディアによって文化が記録、保存され、現在ではコンピュータという電子機器が文化の保存と伝達のために不可欠な道具であるように、技術の発展と社会の要請に応じて物理的装置としての道具は変化、進歩することになる。いうまでもなく、物理的装置としての道具は文化資源の保存と伝達に多大な影響を与える。デジタル技術は資源化できる対象を飛躍的に拡大し、文化資源の範囲を、たとえばDNAの塩基配列に関するデータバンクという微視的なレベルから宇宙科学分野の天体に関するデータなどの巨視的なレベルにまで拡張させている。

そして、三角形の底辺が「社会的組織」、あるいは「社会的機構」である。信念や知識などの文化資源が物理的装置としての道具によって保存されるには、個人的な営みを超えて社会的な営みとして制度化されなければならない。こうし社会的組織の典型が図書館であり、博物館である。社会的組織として図書館が機能することにより、文化資源が体系的に収集・組織・蓄積され、必要とする人々に提供・伝達されるのである。

Sheraは、文化が存続し継承されるには、「知識」や「信念」「物理的装置」「社会的組織」が一定の調和を保ちながら、思考の伝達のためのメディアが存在しなければならいとして、その重要性に着目している<sup>6)</sup>。先述したとおり、文化とは学習し、伝達される人間の活動の総体である。学習・伝達のためには、学習・伝達の対象となるものが言語や画像によって記録されていなければならない。図1の三角形

の内部に示されたコミュニケーションのもとに言語、画像、記録物というメディアが配置されているのはそのためである。言語・画像という表現手段によって学習・伝達の対象が記録されたメディアが存在し、それを利用することにより、文化の伝達というコミュニケーションが可能となるのである。

Sheraは図書館と教育の関係をも取り上げ、図書館が文化的遺産の保存と伝達という役割を担うことにより、学校、大学、新しいメディア、その他の知識産業とともに、教育という制度(institution)がその影響力を行使する際の手段(agency)の一つになるとして、教育における図書館の意義について重視している<sup>7)</sup>。

教育と図書館との関係については、P. Butlerも注目し、近代科学による知識の増大という現代社会における図書館の教育における重要性について、次のように指摘している。

蓄積された知識は学問的な学校教科の枠をはるかにこえている。両者が釣り合うといった時期があったのは昔の話である。今日教育の視野は相当に広げられて、社会の各員が知的蓄積の共有財産にたよれるようなプロセスを全部抱えこまねばならないことになっている。この点で図書館は新しい意義を受持っているものであり、学校について重要なものとなっている<sup>8)</sup>。

文化とは学習し伝達される人間活動の総体であり、その総体とはSheraの指摘の通り、信念や知識であるとするならば、学校教育を通して学習し伝達される信念や知識はもはや社会が有している知識全体から見ればごく一部の基礎的なものに過ぎない。

Butlerは、“図書とは人類の記憶を保存する一種の社会的メカニズム”<sup>9)</sup>と述べているが、こうした図書を収集・蓄積・保存している図書館を通して、学校教育で扱われなかった知識あるいは学校教育後に新たに生産された知識が人々の間で学習され伝達される点に注目したのである。

Butlerは、また“図書は総体としては社会的記憶の中枢神経になぞらえうる実質体である”<sup>10)</sup>とし、図書を保存し伝達する図書館を運営する図書館員の役割を次のように指摘している。少し長くなるが、文化資源と図書館とのかかわりを考えるうえで重要な内容を含んでいるので取り上げる。

図書館員の第一の務めは、読者に科学のいうところが正しいと証明することではないし、新しく事実を発見させるよう手助けをすることでもない。何よりもまず文化の保管者として尽くすのであって、読者が何を要求しようと、それが記録にのせられている限りは探し出す手助けをしなければならぬ。[中略]こうした事はしかし彼 [引用者注：図書館員]の本来の任務ではない。その主要な仕事とは、地域社会のため、社会の福祉に真に必要な記録類を収集し、この目的にそうよう図書館の適正な組織と運営を図ってゆくことになる<sup>11)</sup>。

(下線は引用者による)

このように **Butler** は図書館員の役割を「文化の保管者」とし、記録類すなわち図書の収集と組織化のための図書館運営を、利用者の情報資料要求を満たすための利用者支援に優先する役割として規定している。同時に、地域社会への貢献、社会の福祉という視点から文化の保管機関としての図書館の役割を捉えている点にも注意したい。さらに注目すべき点は、**Butler** の図書館員の役割に関する考え方は利用者支援の捉え方に見られる。すなわち、図書館員が利用者に提供すべきサービスは探索支援であって、利用者から提示された情報資料要求を表した質問に情報源を使って回答する質問回答型のサービスではないとしている点である。

図書館の役割を、記録類という文化資源の保管によってもたらされる地域社会への貢献と福祉にあるとする **Butler** の考え方の基底には、以下の指摘に見られるように記録というものもつ社会的重要性への深い認識がある。

何百万人という人たちが、何世紀にもわたって無数の記録に書き残した記述の形で、社会は社会自体の知恵のほぼ完全な集大成をもっている。社会は、このようなぼう大な量の本のなかにも、何世代もの人間をこえて生き残る記憶の実質的な保存装置を造っておいたわけである<sup>12)</sup>。

さて **Butler** は、“図書館は図書を生きている個人の意識に還元する社会的装置”<sup>13)</sup>としたうえで、いま生きている人間にとって社会に図書館が存在する意義について次のように述べている。

知識が社会的に蓄積されて存在するということは、社会とその一人一人の構成員を結ぶ関係の上で大きな意義をもっている。集団の立場からすれば、全体から正当に選択された知識は公共の福祉の点からも個人に伝達されねばならない。個人の立場からいうと、この関係はどの人間でも自由に公共の蓄積から知識を取りだしてこられるという含みをもつ<sup>14)</sup>。

上記の指摘で重要な点は、図書館が社会に蓄積された知識の公平な分配に寄与するという点である。近代図書館が無料制を採用する主な理由は、この知識への公平なアクセスの保障にあるとあってよく、無料制は公共の福祉の観点からも堅持されなければならない原則といえる。

さて、社会における記憶装置としての図書の重要性については、暗黙知の理論で有名な **M. Polanyi** が次のように指摘している。

この二、三千年で、人類は、暗黙知の能力に言語と書物の文化機構を装備させて、理解＝包括の範囲を桁外れに広げてきた。こうした文化的環境に浸りながら、いま私たちは、その範囲が著しく拡張した「潜在的思考」に反応しているのだ<sup>15)</sup>。(下線は引用者による)

暗黙知とは言語化できない知恵や技能を指し、われわれの意思決定に重要な働きをするわけだが、一方、図書とはまさに言語化された知識や信念が記述されているメディアである。**Polanyi** は図書というかたちをとって言語化された知識や信念が暗黙知とあいまって理解の範囲を限りなく拡張している点に注目しているのである。

**Polanyi** の指摘で注目すべき点は言語と書物を文化機構としてとらえている点である。すなわち、文化が機構として成立するには、言語化され、書物という物理的実体を必要とする、ということである。書物というものが文化の産物であることについて **Butler** は次のように指摘している。

図書は文明社会においてのみ造り出された加工物品である。この明白な事実には多くの歴史的側面が含まれている。著者が書く以前

に言語が、そして記述する表現システムがなければならぬ。この二つは文化というものが思い通りに作りだしたにすぎない<sup>16)</sup>。

図書が文化の産物であるとは、ある対象を文化資源化するとは、その対象を言語で記述し、メディア化することを意味するといえよう。ここでいう言語とはいうまでもなく文字言語のみならず、音声言語をも指すが、資源化にあたってはさらに映像による対象表現を含めて考えてよい。

暗黙知とは異なるが、ある特定個人の意識にのぼらない知識、あるいはある特定個人は有していない知識であるが、社会に分配されている知識というものがある。すなわち、社会の記憶装置としての図書には記録されているが、ある特定個人の知識には含まれていない知識である。このことに関連して経済学者 F.A. Hayek はこの社会に存在するが特定個人には所有されていない知識の重要性に着目し次のように指摘している。

問題は、資源の利用の範囲を誰かひとりの人の管理能力の範囲を超えて、いかに拡大するかであること。[中略] この問題は、決して経済だけに固有なものではなく、ほとんどすべての真に社会的な現象、言語およびわれわれの大部分の文化的遺産に関しても生じるのであって、まさしくすべての社会科学の中心的理論問題を構成する。[中略] われわれは、自分たちが何をしているのかを考えることなしに成しとげることができる重要な作業を殖やすことによって文明は前進するのである。これは社会の領域において深い意味がある。自分では意味のわからない公式、記号、規則を絶えず利用し、それらの使用を通して、われわれ各自が所有しているのではない知識を利用する<sup>17)</sup>。(下線は引用者による)

われわれは、ある行動を選択する場合、その行動に必要となる知識を常に明確に意識しているわけではない。たとえ意識している場合であっても、その知識を完全に理解しているわけではなく、また完全な理解が必要とされているわけでもない。たとえばコンピュータを使用する場合、演算処理装置の仕組みや記憶装置の動作を理解している必要はない。高度に科学が発達した現代社会においては、われわれ個

人が所有する知識はごく一部に過ぎず、きわめて限られており、Hayek のいう知識の分業体制のもとで社会が成立しているのである。

そうした社会において、記憶装置としての図書はわれわれ個人の限られた知識を補完する役割を担っているのである。それゆえ、図書が有する知識を生きている個人の意識に還元するための社会的装置である図書館とその運営にあたる図書館員の機能に関する次の Shera の指摘は卓見である。

社会が何を知っているかをいかにして知ることか、また知識は社会環境全体にいかに関与を与えるか、これらの問いに答えることこそが図書館員が社会において演じる役割の核心であり、社会的手段としての図書館の果たす役割である<sup>18)</sup>。

社会が知っていることとは、社会の記憶装置としてこれまでに出版された図書に記録された知識の総体である。出版された図書が知識の総体として機能し、Polanyi がいう文化機構となり、社会の知となるためには、図書を収集・組織・蓄積し、保存する社会的組織を必要とする。この社会的組織こそが図書館である。それゆえ、Butler が指摘するように、図書館員は文化の保管者として、保管された知識の総体から個人が必要とする知識の探索の手助けをする役割を演じるのである。

われわれは、Hayek の言うように、多くの活動において、その活動に必要な知識を明示的に意識することなく遂行可能であるが、それは、その活動を成立させるために知識が必要でないことを意味するのではない。必要な知識は社会に偏在しているながら、当の活動に従事している個人がその知識を所有し、記憶、理解していることを常に必要とはしていないということである。図書を生きている個人の意識に還元する社会的装置として図書館が機能していることは、明示的に意識されていなかった知識をひとたび必要とし、確認しようとするならば、その確認のための仕組みが社会に用意されている、ということである。図書と図書館とはこのように何かを知る際の拠り所となるものである。この何かを知る際の拠り所としての図書および図書館の機能を P. Wilson は *cognitive authority* と称したが<sup>19)</sup>、これこそが図書館に求められる重要な機能であり、この機能を発揮するための制度や仕組みを探究する研究領域が図

書館学といえる。

この章を締め括るにあたり、Butler の図書館学の研究領域に関する指摘を取り上げる。

図書館学は図書館の仕事，すなわち，社会の蓄積経験を図書という媒体を通じて社会の個々の人々に伝達する，この理論面だけを扱ってよい<sup>20)</sup>。

簡潔ではあるが，図書館学が文化の保管と同時にその伝達を考究する学問分野であることが端的に述べられている。

## 2. 資源概念とその類型

### 2.1 資源概念

ここでは，資源における文化資源の位置づけについて考察する。

そこでまず，事典での定義を確認しておきたい。

『日本大百科全書』(小学館)では，科学技術庁の報告書『将来の資源問題—人間尊重の豊かな時代へ』<sup>21)</sup>を援用しながら，資源を次のように定義している。

科学技術庁資源調査会は，「資源とは，人間が社会生活を維持向上させる源泉として，働きかける対象となりうる事物である。」と定義し，さらに「資源は物質あるいは有形なものに限らない。まして，天然資源のみが資源なのではない。それは，潜在的な可能性をもち，働きかけの方法によって増大するし，減少もする流動的な内容をもっている。欲望や目的によっても変化するものである」としている。

この最広義の定義に即して，次のような分類がなされている。

- [1] 潜在資源 (1)気候的条件，(2)地理的条件，(3)人間的条件
- [2] 顕在資源 (1)天然資源，(2)文化的資源，(3)人的資源 (人間資源)<sup>22)</sup>

この定義では，資源を潜在的なものと顕在的なものに分け，顕在資源のなかに文化的資源<sup>23)</sup>を位置付けている。この定義で注意すべき点は，資源とは社会生活を向上させる有用性をもっていること，また，物質や有形なものに限られないということ，および，

欲望や目的が資源の在り方によって決まること，である。

資源の特徴を説明するにあたりこの欲望と目的の重要性に着目しているのが，資源に関する古典を著している E.W. Zimmermann の以下の定義である。

「資源」という言葉は，事物または物質に当てはまるのではなく，事物または物質の果たしうる機能，あるいはそれが貢献しうる働きに当てはまる。すなわち，欲求 (wants) の充足のような所与の目的を達成するための機能，または働きをいうのである<sup>24)</sup>。

この定義にあるように，資源が欲求と目的の達成に寄与するものとするならば，資源とは人間に利用されるものであり，それが役に立つものであることが重要となる。さらには，資源という概念は欲求と資源を利用する能力との関係から捉えることができる概念といえる。この欲求と利用能力との関係は，①主観的，②相対的，③機能的に分けられる<sup>25)</sup>。

第一に，主観的關係とは，環境のなかのあるものが人間にとって役立つもの，すなわち資源とみなされるかどうかは人間の欲求と利用能力という人間の側の評価によって決定される，ということである。つまり，人間の欲求の対象となりうるものが資源となる。個人の欲求は主観的なものであるから，何を資源として利用するか，個人ごとにより変わるようになる。たとえば，人間がある図書を資源とみなすかどうかは，まずその図書に記録されている知識への欲求が存在していなければならない。ある個人にとって，その知識への欲求がなければ，その図書は資源とはならない。それに対して，別の個人にとってその知識の有用性が高く欲求が生じれば，その個人にとってその図書は資源の候補となる。ここで資源の候補としたのは，欲求の存在に加えて，利用能力が伴っていることが資源とするもう一つの条件になるからである。確かに，その図書に含まれている知識はその個人にとって有用性があり，役に立つものであっても，その知識を理解する知的能力，語彙力がなければその図書を利用することはできない。その個人にとっては，同じテーマについてより平易に記述されている図書でなければ資源とはなりえないのである。

Zimmermann は，資源の候補となる環境と人間の欲求との相互関係を図2のように位置付けている。

Zimmermann によれば、この図は原始人と自然との関係を示すものとしているが、現代社会における人間と環境との関係のなかで資源を位置付ける枠組みとして有効な図式といえる。この図は、人間のもつ欲求の充足のために、環境から有用な事象・事物を認知し、利用可能なものへ開発されたものが「資源」となり、その資源によって当初の欲求が充足されるという関係性を表している。

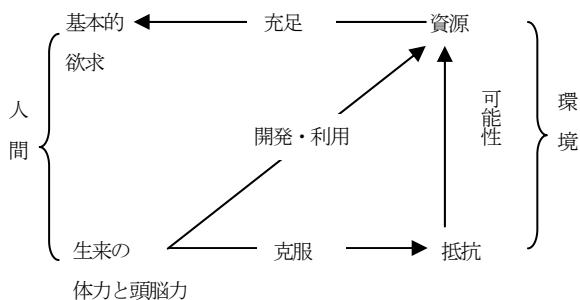


図2 人間の欲求と資源との相互関係<sup>26)</sup>  
(出典：ジンマーマン, E.W.『資源サイエンス』 p.25.)

図2に示された抵抗とは、環境から欲求充足につながる部分を有用性のある事象・事物として資源化する際に生じる障害である。先ほどの例でいえば、求める知識が記録されている図書を利用し、欲求を充足したいものの、その知識を理解するために十分な知的能力がなく利用できない状況の場合、知的能力の不足がその図書の資源化を阻む抵抗といえる。ゆえに、「克服」とはその知識の理解に必要な語彙力やその理解に不可欠な基礎的知識の獲得ということになる。

さて、Zimmermann は図2で示されている基本的な人間と環境・資源との関係を踏まえたうえで、文明が高度に進歩した環境下にある人間と資源との関係を図3のように示している。

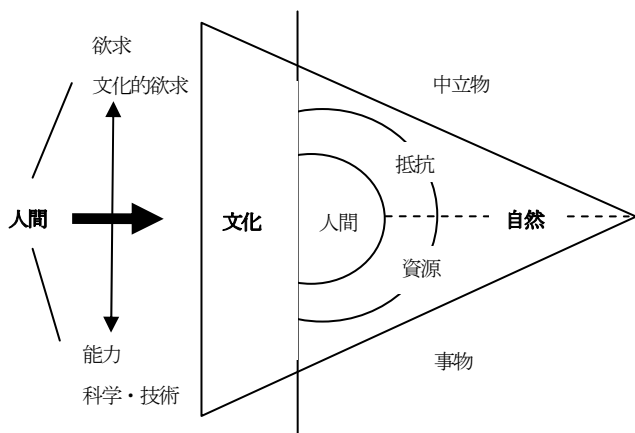


図3 人間・文化・資源の相互関係<sup>27)</sup>  
(出典：ジンマーマン, E.W.『資源サイエンス』 p.25.)

この図は、“槍の穂先として文化を表現した概念は、人間が文化を自然界にぐっと深く突き刺し、「中立的事物」をますます多く資源に転換させている”<sup>28)</sup>ということを示している。ここで中立的事物とは資源化されていないものをいう。この図の左端が示すように高度文明社会では、科学・技術の能力を駆使して欲求を充足する資源を獲得することになる。たとえば、鉱物資源や海洋資源といわれるものは、科学・技術力を駆使することによってはじめて資源として獲得可能なものである。こうした自然資源だけでなく、環境から自然資源を獲得するための科学・技術もまた知識資源として機能する。このような知識と資源との関係について Zimmermann は次のように指摘している。

人間資源のうち比べものにならないほど大切なのは、知識である。[中略] 知識はまさに他のあらゆる資源の母体である。[中略] 人類がより高い文化水準へ向上する限り、文化は資源をつくりだす動的な力としてみますます重要になるはずである<sup>29)</sup>。

資源の類型については次節で取り上げるが、知識という資源は文化資源の一つであり、Zimmermann が指摘するように、知識資源と自然資源とは前者が後者を創出するという関係にある。よって、図3の中の文化は中立的事物を資源化するための資源として捉えられる。ところで、文化によって資源化されるものは、なにも自然だけではない。社会科学の新しい理論が人間社会の新たな側面を描きだし、新たな知識として資源化することがある。たとえばマルクスの資本論という重要な文化資源が資本主義社会を一変させる新たな社会観という知識資源を創出した例は、文化資源による新たな知識資源の創造を示したものである。

社会や思想に関する文化資源は自然環境のなかで資源化する対象を変化させる場合がある。たとえば、エコロジーを重視した思想という文化資源が優勢になった社会では、石炭や石油という天然資源は中立物となり、代わってこれまで資源化の対象として重視されてこなかった風力や太陽エネルギーというものを重要な自然資源として位置付けるようになるような事例があげられる。

次に欲求と利用能力との第二の関係である相対的關係を取り上げる。これは人間の欲求と能力のあり

方は、社会によってあるいは歴史的な変化によって異なり、社会との相対的な関係のうえに成立する、ということを表している<sup>30</sup>。いうまでもなく、人間の欲求は社会とは独立に生じるものではない。その個人が歴史上どのような時代に生き、いかなる社会の成員であるかによって、資源化できるものの範囲も必要となる資源も変化する。現代社会に生き、高度情報化社会に身をおく人間は、インターネット上の多様な情報を文化資源として活用することが求められ、それにともない社会にはネットワーク情報源の資源化が要請されることになる。

最後に機能的関係を取り上げる。この関係とは、資源は人間の欲求を満足させるように働くという点で機能的な特性をもち、欲求と能力は資源がその一部をなす環境によって影響、制限を受けるという意味で資源のあり方と人間の欲求は相互に関数的（機能的）である、ということを表している<sup>31</sup>。すなわち、ある明確な欲求がありそれが中立的な事物を資源化する場合、資源となりうる事物を含む環境に身を置くことにより、潜在化していた欲求が刺激され、環境の一部を資源化し利用するという、二通りの場合があるということである。

## 2.2 資源の種類と相互関係

資源とは、前節で見えてきたように、人間の欲求と目的によって生み出されるものである。人間の欲求や目的のないところに、資源という概念が成立しない。換言すれば人間社会を抜きに資源というものは考えられない。

人間社会にとって必要となる資源は言語を使って生産される象徴系資源と社会を取り巻く環境といえる生態系資源に分けられる。人間社会はこの象徴系と生態系からなる資源基盤上に成立しているのである<sup>32</sup>。

この象徴系資源と生態系資源との関係は基本的に前者が後者を規定するという関係にある。すなわち、象徴系資源によって生態系資源となる範囲が決定される、ということである。この関係は Zimmermann が示した図3の人間・文化・資源の相互関係からも明らかである。

内堀はこうした象徴系資源と生態系資源との関係を資源の直方体として図4のように分析している<sup>33</sup>。上の面が象徴系であり、下の面が生態系である。

この資源の二大領域の関係は、生態系からは資源材料が供給され、象徴系からはその生態資源への意

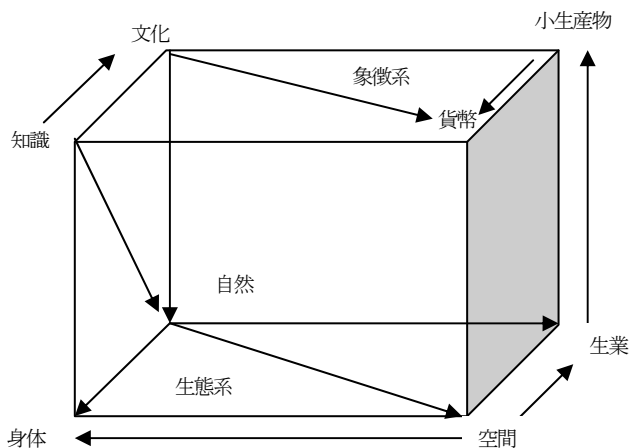


図4 資源の直方体: 8つの資源カテゴリーの連関<sup>33</sup>  
(出典:内堀基光「序 資源をめぐる諸問題『資源と人間』 p.26.)

味が付与されるという関係である。矢印は始点にある資源による終点にある資源への意味付与作用、または始点にある資源が終点にある資源を内包するという包摂関係を表現している。

この資源の直方体の各頂点には以下の8つの資源カテゴリーが配置されている。象徴系資源領域である上の面には、文化資源、知識資源、小商品あるいは小生産物資源、貨幣資源が配置され、底面の生態系資源領域には、加工される自然資源、生業資源、空間資源、身体資源が置かれている。

いうまでもなく象徴系資源は言語を中心として生成される資源であり、なかでも知識を記録した図書は象徴系資源の中核的存在である。知識資源から文化資源への矢印は知識が文化を意味づけること、すなわち文化の理解はその文化に関係する知識の獲得を前提とすることを表している。また、文化資源から貨幣資源への矢印は、貨幣の交換による経済活動はその経済活動が営まれる社会が有する文化資源を基盤に成立することを表している。

象徴系資源領域にある文化資源と知識資源からは生態系資源領域の自然資源に矢印が向かっているが、象徴系資源領域と生態系資源領域を関係づける資源こそがこの文化資源と知識資源である。Zimmermann による人間・文化・資源の相互関係(図3)が示しているように、自然のなかの中立的な事物から何を資源化するかを決めるのは人間の欲求であること、資源化するためには科学・技術という知識資源の利用が不可欠であること、これらの関係性を知識資源から象徴系資源領域のなかの自然資源に向かう矢印は示している。

生態系資源領域では、自然資源が始点となって他の

三資源に向かって矢印が出ている。身体資源、空間資源は自然資源の一部であり、包摂関係にあることはいうまでもない。生業資源は自然資源と空間資源を始点とする矢印の終点に置かれ、小商品に向かう矢印の始点となっている。この関係は、たとえば農耕地を生業資源として農作物という小商品を生産するという関係を表している。

以上、資源の8つのカテゴリーとその相互関係を見てきた。象徴系資源の中心にある文化資源が生態系資源を意味づけていることから、文化資源が8つの資源カテゴリーの中心にあって、8つの資源を成立させていることがわかる。その文化資源を意味づけているのが知識資源であり、図書はその知識資源の中核的存在として機能する重要な資源である。本章では文化資源の特性と文化の資源化における図書館の機能について取り上げる。

### 3. 文化資源の概念と文化の資源化

#### 3.1 文化資源と文化資本

文化資源の概念を検討するにあたり、文化資源と密接な関係にある文化資本についてまず取り上げる。文化資本という概念については、経済学の分野において次のように定義されている。

経済学的意味での文化資本概念を用いれば、私たちは有形・無形の文化的現象を、価値を長期保存するための貯蔵庫や、諸個人および諸集団のための便益の提供者として明確化することができるようになる<sup>34</sup>。

この指摘のなかでいう価値とは経済的価値とともに文化的価値を指している。ゆえに文化資本とは、“経済的価値に加えて文化的価値を具体化し、蓄積し、供給する資産”<sup>35</sup>という定義が導かれる。

このような文化資本には二つの形態が存在する。第一のものは「有形」で、建物や様々な規模・単位の土地、絵画や彫刻のような芸術作品、工芸品などの形態で存在することとなる。第二のものは「無形」な文化資本であり、これには集団によって共有されている観念や慣習、信念や価値といった形式をとる知的資本として成立するものが含まれる<sup>36</sup>。

この文化資本はその文化的価値ゆえに経済的価値を生み出すことになる。絵画という有形な文化資本は物質（画材）自体に経済的価値をもたないが、そ

の文化的価値が大きな経済的価値をもたらすようにである<sup>37</sup>。一方、音楽や文学それ自体は無形の文化資本であることから、絵画のようなモノの取引の対象となることはなく、代わりに、その利用すなわち文化資本をサービスとして提供することを通じて経済的価値を生み出すことになる<sup>38</sup>。

ところでD. Throsbyは自然資源と文化資本との相似性に着目し、次のように指摘している。

過去から継承されてきた文化資本は、一種の授かりものとして私たちにもたらされるようなものである自然資源と共通点を持っている。自然資源は自然の恩恵に由来するものであり、文化資本は人間の創造活動から生まれるものである。そして両者は現在の世代に管理の義務を課してくるのであり、[中略]それは持続可能性問題の本質といえる。さらに、類似点は「自然のバランス」を支え維持する自然の環境システムの機能と、人間文明の文化的な生活と活力を支え維持する「文化的環境システム」として言及できるようなものの機能とのあいだにも見受けられる<sup>39</sup>。（下線は引用者による）

詳しくは次節で取り上げるが、資本と資源では、前者が構造志向的であるのに対して、後者は行為志向的であるという違いがある<sup>40</sup>。しかしながら、Throsbyのいう管理義務は、資本であれ資源であれ、その違いに関わりなく必要なものである。文化資源についていえば、保存と管理が伴ってはじめて資源として持続可能となり、文化の継承という機能を発揮することができるのである。より厳密に言えば、保存と管理なくして文化資源とはなりえない、ということである。一例をあげよう。絵画は有形な文化資本であり文化資源であるが、厳密には、絵画は描かれただけでは資本にも資源になりえない。その絵画が美術館あるいは画商によって、一定の保存・管理が行われ、利用可能な状態あるいは取引可能なものになることによってはじめて文化資源あるいは文化資本となりえるのである。

図書についても同様である。たとえば文学作品は書かれただけでは文化資源あるいは文化資本となりえない。その作品が書店や図書館という組織によって保存・管理されてはじめて流通し利用されることになる。さらにその文学作品が長期的に持続可能な



資源として利用されるには、図書館という社会的組織の管理下におかれる必要がある。Shera が図書館は文化資源の保存と伝達という役割を担う社会的組織と規定したのは、この文化資源の管理機能を指しているのである。

次に文化資本論の提唱者として有名な P. Bourdieu の考え方を取り上げる。Bourdieu は、文化は富のように蓄積され、世代を超えて継承・再生産される資本形態として捉え、次の三つに区分している<sup>41,42)</sup>。

第一に身体化された文化資本である。具体的には知識、教養、趣味、感性、技能、性向などである。これはハビトゥスといわれるもので人々の日常経験において蓄積されていくが、個人にそれと自覚されない知覚・思考・行為を生み出す性向であり、身体化され、特定集団において再生産されるものである<sup>43)</sup>。

第二に客体化された文化資本である。これは有形物（絵画、書籍、道具、機械など）を指し、例として芸術市場において価値が付与された美術作品、文学作品に代表されるものがあげられる<sup>44)</sup>。

第三に制度化された文化資本である。これは証書、免状などにより社会的に認められた肩書き、資格を指し、大学や美術館など文化資本の蓄積と資格を社会的に保証する制度と深く関わるものである<sup>45)</sup>。

この三類型の文化資本のうち、図書館が対象とするものは、いうまでもなく第二の客体化された文化資本であるが、それらを保存・管理・提供する社会的制度であり社会的組織である博物館や図書館は制度化された文化資本に深く関わるものとして位置づけられる。

最後に資本概念と資源概念の違いについて触れておきたい。山下は Bourdieu の文化資本論を論ずるなかで、その違いを次のように指摘している。

資源としての文化が人が生きていくための手段として利用され、活用されるのに対して、資本としての文化は蓄積され、再生産される。[中略] 文化をある歴史的再生産の時間においてみると、資源としての文化は制度を介して資本としての文化に転化しうるのである<sup>46)</sup>。

この山下の指摘によれば、資源概念は利用と活用に、資本は蓄積と再生産にそれぞれ関連づけられている。そこには文化を資源とするために必要となる

手続きやプロセスが考慮されていない。ある文化的事象・事物が資源となるためには、その文化的事象・事物がまずもって認知され、さらに保存・管理・蓄積の対象として選択され、実際に保存・管理・蓄積がほどこされなければならない。保存と蓄積という管理は、Throsby の指摘するように、文化の資源化と文化資源の持続性に不可欠な手続きといえる。

一方、森山は文化資本と文化資源の違いについて、前者が構造志向であり、後者が行為志向的であるとして次のように指摘している。

「文化資本」の概念は、階級分化と階級の再生産という社会の構造にかかわる事象を、何らかの時間的幅において補足する概念装置といえる。したがってそれは、構造志向的である。その構造志向性との対比において、「文化資源」という概念は行為志向的なものとして用いることができるのではないか、[中略] ある特定の行為者がある特定の行為によってある特定のものを「資源」として活用する、その行為の具体性、およびその行為が紡がれる場の具体性を可視化するものとして、「文化資源」という概念を用いることができるのではないだろうか<sup>47)</sup>。

この森山の説明も、資源化とは実は蓄積を前提とした営為であることに目を向けていないものの、図書館の役割を考えるうえで示唆的な視点を提示している。Bourdieu の文化資本論で重要なことは、個人が獲得する文化資本（身体化された文化資本）、あるいは個人の学習に利用される文化資本（客体化された文化資本）はその個人が属する集団や階級に蓄積された文化資本に依存する、という点である。このように Bourdieu の想定する社会構造と個人が属する社会階級は固定的であり静的である。個人がどのような社会に生まれ、どのような家族のなかで育ったかによって利用可能な文化資本が異なり、それによって蓄積される身体化された文化資本も決定しているとする社会観である<sup>48)</sup>。

この Bourdieu の社会観には学習によって獲得された知識によって可能となるような社会移動が考慮されていない。人々は、学習に深く関わる客体化された文化資本である図書を通して知識を獲得することが可能である。図書館が図書に記録されている知

識への公平なアクセスを保障するならば、他者との間にある身体化された文化資本の差異を解消し、社会移動を実現することが可能となる。

### 3.2 文化の資源化

ここでは、文化がどのようにして資源化されるのかを取り上げる。山下は文化の資源化について、日常の実践の場での資源化、国家による資源化、さらに市場による資源化の三つの社会的次元に区分している<sup>49)</sup>。

第一に日常的な文化実践の場、すなわち家庭、職場、学校、地域社会などにおいて、言語から宗教までのさまざまなレベルの文化を無意識のうちに行う資源化である<sup>50)</sup>。ここでの資源化された文化はBourdieuの文化資本のうち身体化された文化資本に対応するものといえる。

第二に国家による文化の資源化であるが、この資源化はさらに三つの資源化に分けられる。第一に、国家を正当化するための資源化である。例えば、歴史書（『古事記』や『日本書記』）の作成があげられる<sup>51)</sup>。第二に、学校教育を通して資源化される文化があげられる<sup>52)</sup>。具体的には教科書がそうであり、また隠れたカリキュラムといわれる言語化されえない学校文化や学校教育を通して伝達される国民文化の資源化があげられる。第三に、国家による文化政策としておこなわれる資源化<sup>53)</sup>として国立の図書館、博物館、文書館による資源化があげられる。

第三に市場による資源化である。この市場による文化の資源化は、文化的価値を有するものに経済的価値を認めて商品化することといえる。山下は“インターネットは現代における巨大な文化の資源化の例である”<sup>54)</sup>と指摘している。グーグルやヤフーという検索エンジンによるネットワーク情報資源の組織化に基づく情報サービスなくして、ネットワーク情報源を資源として活用することはできないことも事実である。

### 3.3 文化の資源化における図書館の機能

最後に文化の資源化における図書館の機能について考察する。文化の資源化の過程について次の図5のように表すことができる。

この図に示したように、文化の資源化については三段階あることに注意する必要がある。まず、我々を取り巻く環境を構成する事象・事物のなかから、特定の事象あるいは事物に着目し、意味付与あるいは価値付けを行い、研究調査の成果として文化的事象・事物を資源化するという段階（第一次資源化）である。ここでの資源第1次資源化の結果、生成されるものを文化資源1とするならば、考古学の発掘調査による、遺跡の発掘が第一次資源化であり、発掘された遺跡は第一次資源化による文化資源1となる。

史料の作成や公文書等の作成も、対象となる事象を記録するという第一次資源化の営みといえる<sup>55)</sup>。公文書としての記録作成を怠ることは、行政活動という事象を資源化不可能にし、過去の行政活動の成果の検証や活用を阻むことにもなる。公文書という文化資源1が作成された場合でも、それらを公文書館の下で体系化し、社会において共有化するための第二次資源化の作業が行われなければ、文化資源1としての公文書自体の存在が確認できず、行政活動の検証につなげることができない。その意味では、以下で述べる第二次資源化の怠りは、第一次資源化の怠りと同じ結果をもたらすことになる。

天文学の分野でいえば、宇宙という対象から観測によってデータを得るという資源化が第一次資源化に相当し、観測データ自体は文化資源1となる。

ところで、考古学を含む人文社会科学が研究の対象とする事象・事物は人間や社会であり、その対象自体は文化的事象・事物であるが、それらの事象・事物から抽出された事象・事物への意味付けが行われてはじめて、その事象・事物は文化資源となる。

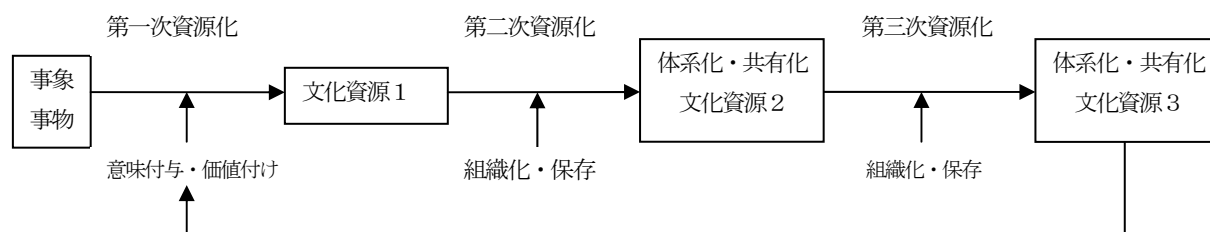


図5 文化の資源化の過程

一方、天文学を含む自然科学が対象とする自然はそれ自体は文化的事象・事物ではないが、自然科学の知識を使って自然から発見・抽出されたデータは文化資源として位置付けられる。つまり、科学的知識を自然に適用した結果、明らかにされ意味付けされることにより、自然界の事象・事物は文化資源となるのである。

さて、第一次資源化の結果、生み出された文化資源は、社会はもとより当該研究領域においてさえも共有された文化資源とはなりえない。考古学の例でいえば、発掘された遺跡自体は文化資源ではあるが、それが博物館等の施設や研究機関において管理され、体系化されなければ、社会はもとより考古学分野においてすら文化資源としての存在が失われることになる。そこで、第一次資源化の結果得られた文化資源1が博物館や研究機関による管理を経て、体系化され共有化される作業が第二次資源化である。こうして文化資源1が体系化され共有化されたものが文化資源2となる。

自然科学も同様であり、たとえば遺伝子に関するデータや物理学のデータは第一次資源化によって得られた文化資源1であるが、それらが研究機関等において管理されなければ、文化資源としての科学データは、社会はもとより当該研究分野においてさえも共有された文化資源2とはなりえない。

では、文化の資源化における図書館の機能はどこにあるのであろうか。それは、第二次資源化によって体系化され共有化された文化資源2をもとに行われた研究の結果、生産された論文や図書という文化資源を体系化・共有化するための第三次資源化の機能である。生産された論文や図書に記録された知識は、この第三次資源化の営みを通して、将来にわたって社会や当該分野における共有知として機能し続けることになる。そして、これらの共有知によって、いまだ資源化されていない事象・事物への意味付与・価値付けが行われるという、新たな文化の資源化のサイクルに入ることになる。

## おわりに

図書館と文化との関係性については、Shera や Butler の指摘のとおり、伝統的に文化の保存と伝達という側面から理解されてきたが、文化資源という概念の導入により、文化活動のなかで図書館の果たす機能をより明確に把握することが可能となる。具

体的には、文化の資源化には3つの段階があり、図書館はその最終段階を担うとともに、第一段階の資源化への基盤を提供する、ということである。

近年、MLA 連携として博物館、図書館、文書館との関係が注目されているが、その関係性とは文化の資源化を担う機能として共通であるが、資源化のレベルは異なる点を最後に指摘しておきたい。

## 注・引用文献

- 1) 『東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻』<http://www.lu-tokyo.ac.jp/CR/overview.html> (最終アクセス日: 2012.2.5)  
『国立民族学博物館 文化資源研究センター』<http://www.minpaku.ac.jp/research/rcrr/> (最終アクセス日: 2012.2.5)
- 2) 『日本大百科全書 20』2版, 小学館, 1994, p.795.
- 3) Shera, J.H. *Introduction to Library Science : Basic Elements of Library Service*. Libraries Unlimited, 1976, p.49.
- 4) 前掲3), p.42-49.
- 5) 前掲3), p.44.
- 6) 前掲3), p.46.
- 7) 前掲3), p.45.
- 8) バトラー, ピアス. 『図書館学序説』藤野幸雄訳. 日本図書館協会, 1978, p.66.
- 9) 前掲8), p.23.
- 10) 前掲8), p.75.
- 11) 前掲8), p.109.
- 12) 前掲8), p.66.
- 13) 前掲8), p.23.
- 14) 前掲8), p.60.
- 15) ボランニー, マイケル. 『暗黙知の次元』高橋勇夫訳. 筑摩書房, 2003, p.149.
- 16) 前掲8), p.99.
- 17) ハイエク, F.A. 「社会における知識の利用」『市場・知識・自由 - 自由主義の経済思想 -』田中真晴, 田中秀夫編訳, ミネルヴァ書房, 1986, p.69-70.
- 18) 前掲3), p.50.
- 19) Wilson, P. *Second-Hand Knowledge : an Inquiry into Cognitive Authority*. Greenwood Press, 1983, 210p.
- 20) 前掲8), p.55.
- 21) 科学技術庁調査会『将来の資源問題—人間尊重の豊かな時代へ—上』科学技術庁調査会, 1971, p.55-57 (科学技術庁資源調査会報告〈第60号〉).
- 22) 『日本大百科全書 10』2版, 小学館, 1994, p.678. 潜在資源のなかの気候的条件には降水・光・温度・風・潮流が, 地理的条件に地質・地勢・位置・陸水・海水が, 人間的条件には人口の分布と構成・活力・再生産力が, それぞれあげられている。  
一方、顕在資源のなかの天然資源には生物資源と無生物資源が, 文化的資源には資本・技術・制度・組織が, 人的資源には労働力・志気がそれぞれあげられている。
- 23) 『日本大百科全書』で取り上げている前掲21)の文献では「文化的資源」と記述されているので, ここでも「文化資源」とはせず「文化的資源」として記述している。

- 24) ジンマーマン, E.W. 『資源サイエンス：人間・自然・文化の複合』ハンカー編, 石光亨訳. 三嶺書房, 1985, p.33. なお, Zimmermann は原書において“wants”という用語を使用している。通常, 欲望には“desire”という用語が与えられるので, ここでは“wants”に対しては「欲求」という用語あてることにする。
- 25) 内堀基光「序 資源をめぐる問題群の構成」『資源と人間』内堀基光編, 弘文堂, 2007, p.20-21.
- 26) 前掲 24), p.25.
- 27) 前掲 24), p.25.
- 28) 前掲 24), p.25-26.
- 29) 前掲 24), p.19, 23.
- 30) 前掲 25), p.20.
- 31) 前掲 25), p.20-21.
- 32) 前掲 25), p.26-27.
- 33) 前掲 25), p.26.
- 34) スロスビー, デイヴィッド『文化経済学入門：創造性の探究から都市再生まで』中谷武雄, 後藤和子監訳, 日本経済新聞社, 2002, p.78.
- 35) 前掲 34), p.81.
- 36) 前掲 34), p.81-82.
- 37) 前掲 34), p.83.
- 38) 前掲 34), p.83-84.
- 39) 前掲 34), p.89-90.
- 40) 森山工「文化資源 使用法：植民地マダガスカルにおける「文化」の「資源化」『資源化する文化』山下晋司編, 弘文堂, 2007, p.65.
- 41) Bourdieu, P. “The Forms of Capital.” In: J. Richardson (ed). *Handbook of Theory and Research for Sociology of Education*. Greenwood, 1986, p.241-258.
- 42) 山下晋司「文化という資源」『資源と人間』内堀基光編, 弘文堂, 2007, p.54.
- 43) 前掲 42), p.54.
- 44) 前掲 42), p.54.
- 45) 前掲 42), p.54.
- 46) 前掲 42), p.55.
- 47) 前掲 40), p.65.
- 48) ブルデュエ, ピエール. 『ディスタンクシオン I : 社会的判断力批判』石井洋二郎訳, 藤原書店, 1990, 501p.
- 49) 山下晋司「序 資源化する文化」『資源化する文化』山下晋司編, 弘文堂, 2007, p.15-17.
- 50) 前掲 49), p.15-16.
- 51) 前掲 49), p.16.
- 52) 前掲 49), p.16.
- 53) 前掲 49), p.16.
- 54) 前掲 49), p.17.
- 55) 平成 21 年に制定された『公文書等の管理に関する法律』では, その第一条に「この法律は, 国及び独立行政法人等の諸活動や歴史的事実の記録である公文書等が, 健全な民主主義の根幹を支える国民共有の知的資源として, 主権者である国民が主体的に利用し得るものであることにかんがみ…」とあり, 公文書を知的資源として規定している。